

附論2

宗教史の立場から見た等妙寺研究の課題—「奈良山」とは—

山本 義孝（日本山岳修験学会理事・宗教学会員）

はじめに

2008年（平成20）3月28日に国指定史跡に指定された等妙寺旧境内については、2018年12月に「中世等妙寺の具体像に迫る」というテーマのもとで「国指定10周年記念シンポジウム」が開催され、それまでの発掘調査成果を総括するとともに、調査研究における現状と課題が整理された⁽¹⁾。等妙寺開基700年にあたる2020年には鬼北町・愛媛県歴史文化博物館共催テーマ展として「奈良山等妙寺の至宝と国史跡等妙寺旧境内展」が盛大に催され、現在も法灯を伝える天台宗等妙寺が継承する主要な寺宝が学術的評価を加えたうえで公開されただけでなく、中世山寺としての旧境内の発掘調査成果と合わせ、その背後に存在する信仰の根源でもあり、山中修行空間である「靈場奈良山」に所在する信仰遺跡調査の概要が示された⁽²⁾。これは今後の中世山寺・山岳靈場研究の在るべき方向性を具体的に示したものとして、高く評価されるだろう。

筆者は2015年から継続して等妙寺・等妙寺旧境内・靈場奈良山の調査研究に、宗教史研究の視点で携わさせていただくことになった。考古学が対象とする「山寺」というのは山の斜面を削って造成した人工平場の集合体を主な対象とし、これに付随する道痕跡、土盛り、集石等を含めた範囲を寺として仮に括り、その空間に対してトレーナーを設定し、あるいは面上に発掘を行い構造解明と対象空間への読み取りを進めるが、この仮の対象範囲は、「山寺」が実際に機能していた当時の実態とは乖離している。

それは「山寺」がなぜ、その場所に営まれなければならなかったのかという最も基本となる問いに答えることができないからで、「山寺」はあくまでも宗教施設であり、信仰の根源が何処にあるのかを解明しないと、その問いに答えることができないからである。筆者は等妙寺研究に携わるにあたり、最初は旧等妙寺が営まれた「奈良山」なるものがどこを指し、どのような山中修行が繰り広げられたのか、山中にはどのような信仰遺跡が存在するのかという課題に対して多方面からアプローチを加えた。そしてこれを基にして「中世山寺」としての等妙寺旧境内だけを調査研究対象にするのではなく、これを含んだ広域空間、「奈良山」研究へ視点を移すこと、つまり「中世山寺」研究から「（山岳）靈場研究」へと目線を変えることを提唱した⁽³⁾。今後は等妙寺研究を南予という一地域だけのテーマとするのではなく、日本宗教史の枠組みの中で、どのように位置づけることが可能なのかを検討する必要がある。本稿は今後、中世山寺としての等妙寺研究を進めるにあたり、基本となる「靈場奈良山」に対する問題点を整理したものである。



写真1 「奈良山等妙寺の至宝と
信仰展」展示会場



写真2 一堂に公開される寺宝
【愛媛県立歴史文化博物館】



写真3 「山岳靈場「奈良山」と
国史跡等妙寺旧境内展」展示会場

1 「奈良山」へのまなざし

現存する天台宗等妙寺の山号を「奈良山」という。旧等妙寺境内開山の経緯を記した最古の史料『歯長寺縁起』においても元応二年(1329)に開山和尚が宇和荘に入り「奈良山を開く」とあるので、これは単なる山号ではなく、実際の山系を指すと読み取ることができるが、これまででは「奈良山」に対する明確なアプローチは見られなかった。そこで、手はじめに「奈良山」なるものについて検討を進めよう。

(1) 鬼ヶ城山系

宇和島市街地のすぐ東方には平野部を挟まず1000mクラスのピークが連なる鬼ヶ城山系が所在し、これを構成する主尾根稜線が滑床渓谷を挟むように東方から①古鬼ヶ城(812m)－②郭公岳(1010m)－東高月山(1181m)－③高月山(旧名称は高ツク/1229m)－櫛ヶ森(1064m)－毛山(1089m)－鬼ヶ城(1151m)－大久保山(1158m)－④八面山(1165m)－⑤三本杭(旧名称は笹力森/1226m)－横の森(1200m)－小屋ヶ森(1184m)－⑥串ヶ森(1160m)とU字形に連なっている(番号は図1の▲番号に対応)。

この主尾根上の稜線は一筋で突出したピークもなく、なだらかで、宗教者が回峰行を実践するには最適な地形をなしている。しかも主尾根上の植生は「役行者の木」と呼ばれ修験道で御神木とされる⁽⁴⁾。シャクナゲ群落帯が複数確認できる。例えば郭公岳、鬼ヶ城、横の森から御祝山までの桧尾根の各主尾根上には特に巨樹が密集し、春峰入峰の時期に相当する5月には一面のピンク色・赤紫色の花に包

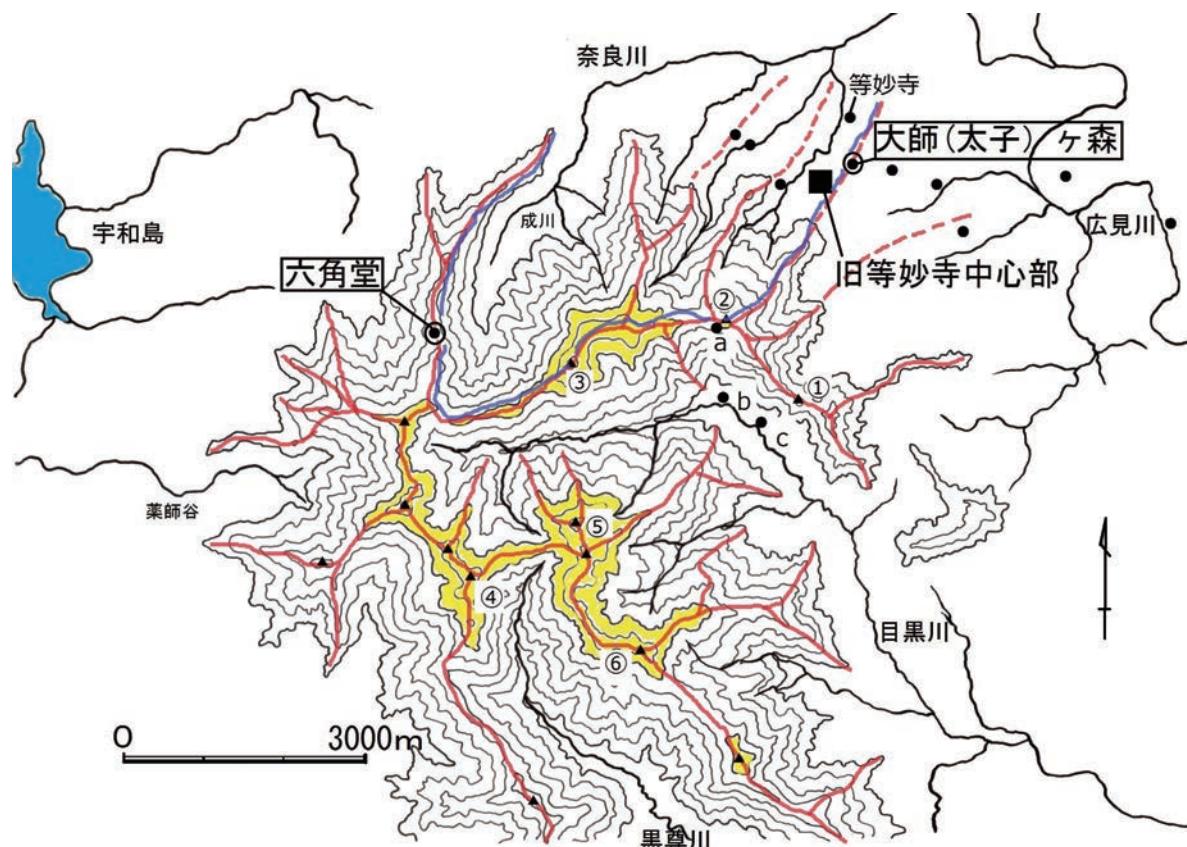


図1 鬼ヶ城山系と等妙寺・等妙寺旧境内の関係

—主尾根の稜線 —川 ▲主要山頂 ①古鬼ヶ城 ②郭公岳 ③高月山(高ツク) ④八面山 ⑤三本杭(笹力森)
⑥串ヶ森 ●山岳信仰に関わる地点(磐座・岩屋・寺・堂) a 郭公岳磐座 b 鳥居岩 c 船岩



写真4 山岳修験の世界観で御神木として尊ばれる
シャクナゲ群落帯が多い鬼ヶ城山系の主稜線

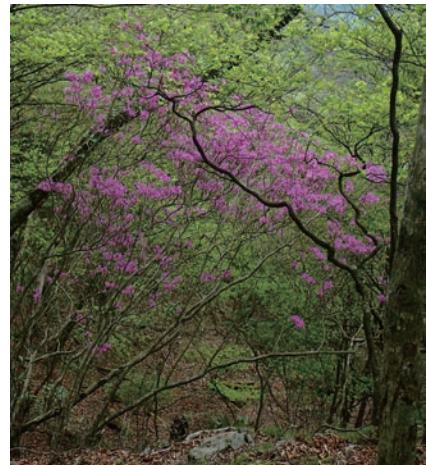


写真5 シャクナゲのトンネル
桧尾根稜線

まれた自然結界⁽⁵⁾を創りだしている。

鬼ヶ城山系の中心は山系最高点、標高 1226 m の三本杭で山頂部は外輪山状に U 字状に取り囲む主尾根稜線からは突出して独立し、まわりの主尾根稜線上をたどると、その姿を見ながら（つまり押ししながら）巡る格好となる（写真 11 参照）。山頂部は一面の笹に覆われ本来は「笹カ森」⁽⁶⁾と呼ばれたが、近世期に宇和島藩領・吉田藩領・土佐藩領の堺杭を設けたことから「三本杭」と呼ばれると伝える。山頂からは縄文から弥生時代にかけての石器と共に 8 世紀代の須恵器壺蓋片が表採されており、律令期における国堺の山神祭祀の存在を考えさせる。

このように三本杭を中心とする鬼ヶ城山系の主尾根稜線上は、伊予国と土佐国の国境をなす自然地形からなる結界線でもあり、開山は意外に古い。等妙寺・等妙寺旧伽藍は鬼ヶ城山系の一角、郭公岳北麓に営まれているが、「奈良山」を郭公岳という単独のピークだけに充てることは誤りで、鬼ヶ城山系全域と認識するべきと考える。

(2) 「奈良山」実態解明の手掛かりとなる「目黒山形模型」と「山境争裁許絵図」

鬼ヶ城山系を歴史的に紐解くうえで欠かせない資料が「目黒山形模型」（以下「山形模型」と略す・写真 6）である。これは伊予国宇和郡目黒村（吉田領）と同郡二郎丸村（宇和島領）の山境争いの中で、幕府評定所に提出の裁判資料の一つとして詳細な現地踏査と測量をもとにして寛文五年（1665）に製作されたもので、模型は敷絵図と一体となっており、最大寸法は縦方向 190 cm、横方向 262.1 cm、敷絵図は 243 cm × 318.7 cm で、絵図の中央部を大きく空けて模型を置くスペースとし、模型外側の山麓部に村を配置し、模型と周辺村落との関係をわかりやすく示している⁽⁷⁾。

模型の仕様は木胎（銀杏）の上に胡粉が塗られ山は濃い緑、平地は黄土色に彩色され、山の斜面には樹木を描き、道は赤の実線、河川は藍色の実線、村境は白線、人家は家の形で描かれている。谷や尾根に白色（胡粉）で多くの書き込みがあり、貼り札も所々に見られる。製作に関する史料と共に一括保存されている点が資料的価値を高め、書き込みの解読不明箇所も復元できる。模型の範囲は松野町の目黒川流域を核に（図 1 の目黒川周辺）鬼ヶ城山系全域に及び、これは旧等妙寺を含んだ鬼ヶ城山系のうち図 1 で示したかなりの部分を占めているだけでなく、製作年代が寛文五年ということは中世期の景観や山中の土地利用の在り方がまだ殆ど残っている時期の作成であること、同年に幕府が作成した目印となる大岩など細部を書き込んだ「山境争裁許絵図」（以下「裁許絵図」と略す）（295.2



写真6 目黒ふるさと館で収蔵展示される「目黒山形模型」



写真7 目黒ふるさと館で写真展示される「裁許絵図」

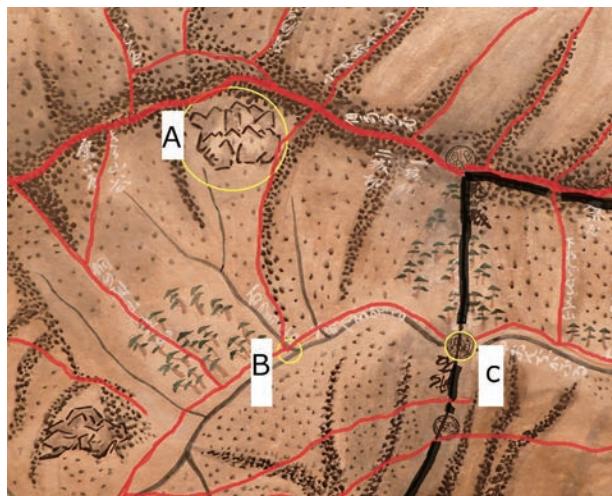


写真8 「裁許絵図」に描かれた磐座

A : 郭公岳磐座（郭公崖） B : 石の鳥居 C : 船岩



写真10 境界線の根拠となった目黒川中央の「船岩」
矢印の地点背後右側の山頂部が郭公岳



写真9 郭公岳への結界「石の鳥居」

cm × 255.5 cm) を合わせて検討することにより、中世「奈良山」の実態を窺うことができる。では「山形模型」と「裁許絵図」の細部を検討しよう。

寛文五年の幕府が定めた新境は「南ハ宇和島ヨリさら山ノ嶺ト申目黒ヨリハ初尾ノ森ト申所すこみとやの尾筋を通り船石ヘカカリ北ヲ鬼ヶ城ガ嶺マデヲ限東西ノ境ナリ 夫ヨリ大あかりおんじがなる口鳥帽子岩地蔵堂マデ嶺通りヲ南北ノ境ト相定訖」(建徳寺文書)⁽⁸⁾ であり、「模型」と「裁許絵図」双方にはこの宇和島・吉田両藩との新境界線が記されている。これは笹ヶ森(三本杭)南側の支尾根分岐点となる皿山(はつおの森)から尾根稜線(すごみとや)を通り、御祝山(998 m)からは東に折れ、その地点から目黒川の真ん中に所在する「船岩」までは地形を無視して直線で繋ぎ、「船岩」からはこの直線を延長して鬼ヶ城山系の主稜線上に相当する鬼ヶ城山西側の鞍部に繋いでおり(写真8の黒線が境界線でその目印として「船岩」が採用されている)、東側新境の目印にも「鳥帽子岩」という大岩が採用されている。

「裁許絵図」には幾つかの大岩が描きこまれるが、特に郭公岳山頂南側に描かれた大岩(写真8のA)は高低差数十m程もある大巖で一帯はシャクナゲ群落帯となっており、上面は平坦で東西方向の主尾根稜線(鬼北町と宇和島市との行政境となる)南側には人工平場一面が造成され、中央部には25 cm × 30 cm規模の柱受け部を加工した礎石(写真13)が一石据えられていることから、この大巖は磐座として宗教利用が行われ、人工平場はその前面に設けられた社殿跡か祭祀空間の可能性がある⁽⁹⁾。そうだとすれば、この磐座を核とする周辺部を郭公岳の山宮と見ることができるだろう。

「裁許絵図」の郭公岳山頂大岩の裾、目黒川畔には「石の鳥居」の文字が記入されている(写真8のB)。現地は花崗岩質の大岩が天井面を残して割れて鳥居状となったもので(写真9)、目黒川側の入口には注連縄が張られて結界を示しており、中を通り抜けることができる。「裁許絵図」を見ると、郭公岳山頂稜線部に向かう山道は「石の鳥居」を起点に描かれていることから、これが郭公岳磐座の一の鳥居として認識されていたことになる。このように信仰対象や磐座となる大岩を抽出して描いていざとすれば、新境の目印となった「船岩」や「鳥帽子岩」も同じように考えることができる。「船岩」の場所は郭公岳山頂への入口部に相当しており、目黒村の里の領域とその奥の神域との境を示す結界石であったことが留意され、幕府評定において特に新境となつたのではないだろうか。

次に「山形模型」の特徴について指摘しておこう。この模型には、これが作製された当時の山道が赤線によって網羅されている。驚くのは主尾根の稜線上が道となっていることは想像できるが、そこから派生する小尾根稜線の全てに赤線の道表示がされており、場所によっては斜面や稜線間の最短距離を結ぶ道も設けられていて、我々の想像を遥に越える密度の濃い山地利用が存在していたことである(図2・図3)。



写真11 郭公岳山頂磐座上より正面に望む三本杭(笹ヶ森)



写真12 郭公岳山頂磐座



写真13 柱受け部を加工した礎石



図2 目黒山形模型全景

山形模型を垂直方向から撮影した画像に記された朱書きの山道を強調したもの。尾根稜線はもちろんのこと、等高線に並行して斜面にも網の目状に肩幅に刈り込まれた山中路が詳細に書き込まれている。

写真14は「山形模型」のうち等妙寺周辺を示したものである。赤線で示される山道は全ての尾根稜線に記され、これを結ぶ連絡路が数多く存在することが判明する。「山形模型」の谷や尾根には白色（胡粉）で多くの地名の書き込みがあり、このうち旧等妙寺や磐座など信仰遺跡を窺わせるものとして「ゑほし岩・等妙寺・等妙寺火道頭・古等妙寺・大師ヶ森・正連寺跡・立岩・権現ヶ森・薬師谷頭・嶋の岩・石の鳥居・鬼ヶ城・船石」を挙げることができる。その呼称の該当推定地で現地踏査を実施し、対象地点を特定することで、これまで知られることのなかつた磐座（例えば大師ヶ森・立岩・ゑほし（鳥帽子）岩）等の信仰遺跡を見出す成果を上げている。「山形模型」「裁許絵図」は宇和島・吉田両藩の林業行政を詳細に物語ることができるだけではなく、中世「奈良山」の山地利用の実態を窺うことのできる希少価値の高い資料なのである。

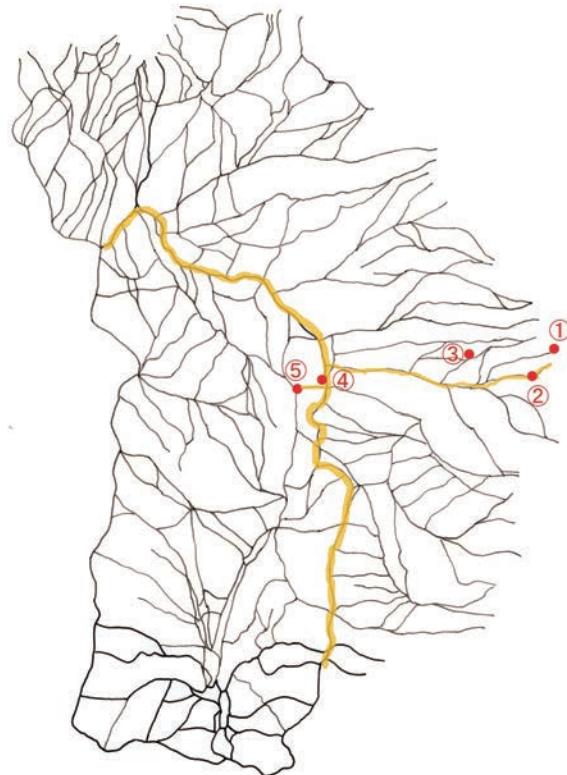


図3 目黒山形模型に書き込まれた山中路

目黒山形模型に記された朱書きの山中路だけを抜き出したもの。

- ①等妙寺 ②大師ヶ森 ③古等妙寺 ④郭公岳磐座
- ⑤石鳥居 ※色付き道は主尾根稜線及び等妙寺火道



写真14 「山形模型」等妙寺周辺

白線は主尾根の稜線（村境） 赤線は山道

2 「奈良山」の拡がり

(1) 篠山山系と「篠山山形模型」「篠山絵図」

鬼ヶ城山系の山並と松田川を挟んで向き合う篠山は高知県宿毛市と愛媛県愛南町・宇和島市の境界に位置する標高 1065m の山で、中世期から明治維新まで観音寺という山寺が所在し、四国八十八カ所霊場第四十番札所の平城山観自在寺（愛媛県愛南町）の元寺、あるいは奥之院とも言われる霊場である。

南北方向に延びる主尾根稜線は篠山山頂部を形成し、この稜線は鬼ヶ城山系と同じく伊予国と土佐国の国境をなしており、概ね稜線の東側が土佐国、西側が伊予国で分けられるが山頂部の堂社や麓の境界については宇和島藩と土佐藩の間で度重なる騒動が起きていて、万治元年（1658）には両藩により江戸の寺社奉行へ訴状が提出され「篠山境界争い」が生じている⁽¹⁰⁾。

ここで注目しておきたいのは、篠山においても「目黒山形模型」と同じように境界争いに伴う「篠山山形模型」が、遅くとも「目黒山形模型」の寛文五年（1665）を遡る明暦三年（1657）までには作製され、おなじくこれに伴うと考えられる「篠山絵図」⁽¹¹⁾も作製されていることである。山形模型は最大寸法 114.5 cm、短軸 67.1 cm の規模で杉材を用いて三個から構成されている。表面は材（木胎）の上に胡粉が塗られて彩色面が作られ、山地は濃い緑、山の斜面には木を描いている箇所も見受けられる。山頂部と観音寺の堂舎は朱色の家の形で表現され、道も朱の実線で描かれ、谷や尾根の所々、山頂付近には朱色で多くの堂舎名と地名が書き込まれている。この山形模型に関連して作製されたと考えられる「篠山絵図」を比較することにより、劣化によって山形模型の判読不明の記載内容を補うことができ、明暦三年以前作製という成立年代から、「篠山山形模型」「篠山絵図」共に篠山の中世期の姿を復元できる貴重な資料である。

篠山は明治の神仏分離により仏教関連の施設が全て取り壊され、仏像仏具は破却され本尊の観音立像等の一部が麓、正木地区の歓喜光寺に移された（第2章第4節で報告）ので、現地には神社化した権現堂の建物以外は一切残らず、跡地は完全に遺跡と化している。しかし「篠山絵図」には山頂部を中心とした諸施設と道が詳細に描かれており、踏査を行い現地と突き合わせることによって神仏分離以前の山中の具体的な状況を知ることができる。

図4は篠山山頂部を中心にして主尾根稜線の形状を抜き出し、山系の形状を分析したものである。篠山山系のうち標高 1000 m を超える高さに達するのは 1065 m の篠山山頂部だけで、そこから派生した主尾根は南北方向では北方向に約 4 km の松田川で終わり、南方向では約 4.5 km の正木地区で終わり、そこには篠山権現（現篠山神社）一の鳥居が所在し、ここが少なくとも近世期における篠山山頂への登拝道入り口であり、この稜線がほぼ土佐側と伊予側の国境となっている（図4 A—B）。

これに対し篠山の最高点から西方向へ派生する主尾根稜線（図4 C—D）は、徐々に標高を下げながらも、その先端は宇和海に突き出た由良岬までの約 30 km にわたって続き、愛南町と宇和島市との行政境となっている。山岳修験における山中抖擞は連続する尾根筋を選んで峰中路（行者道）として肩幅（三尺道）に刈り込んで山中を移動する行動パターンを基本とし、その峰中路は一般に国境や郡境となり、現在も行政境として引き継がれているものが多いことからすれば、篠山山系における山岳修行の行動範囲は東西に延びる山系を主軸に想定するのが妥当であり、岬先端まで続く海への信仰と山の信仰との繋がりが篠山信仰の根底には存在すると考えられる（写真 22 参照）。

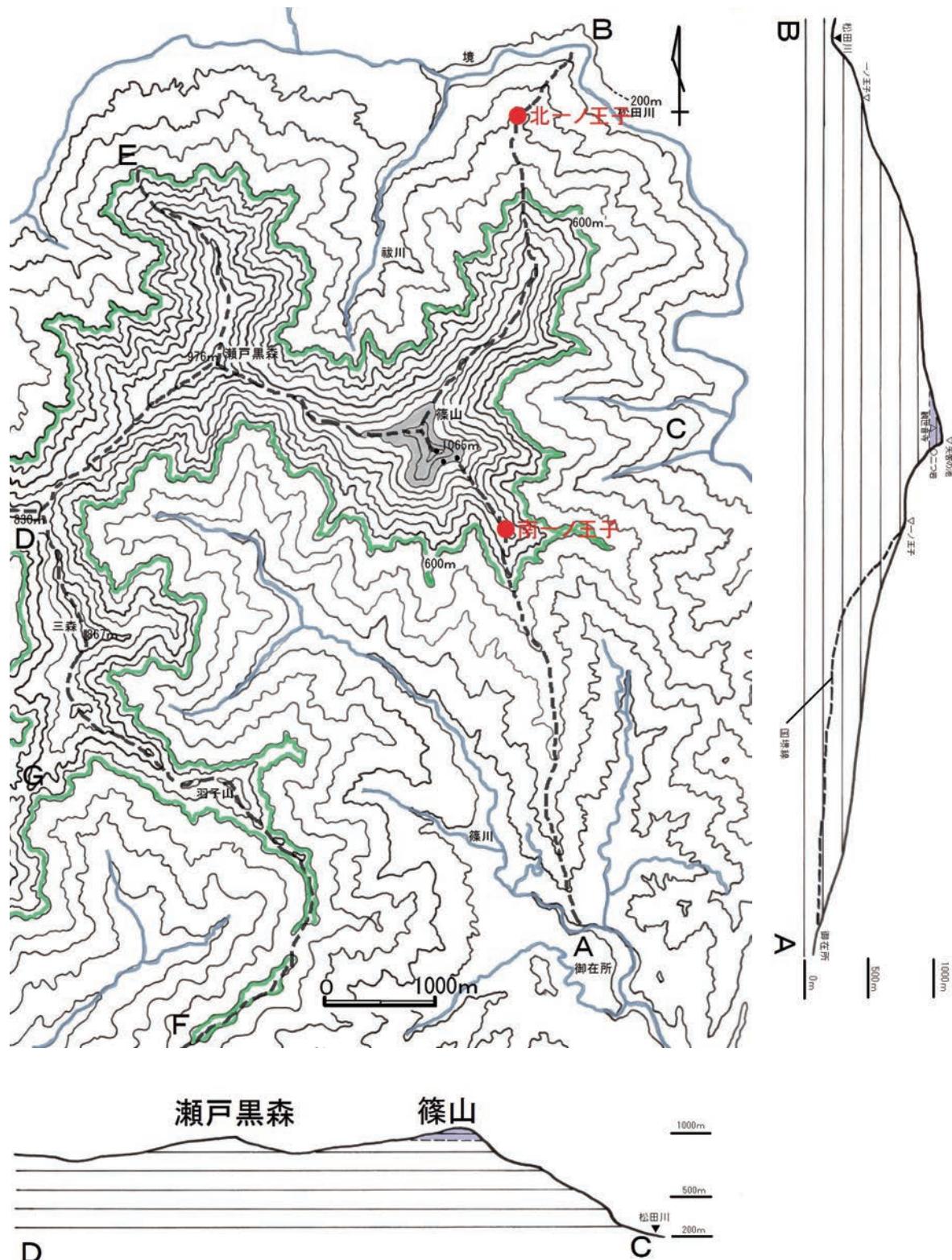


図4 篠山を中心とする主尾根稜線の関係

標高 600 m を境に上高度は 50 m 毎に、下高度は 100 m 毎に等高線を記し、尾根稜線と谷地形を示した。これを明確にするため図中の 600 m 等高線は太線で縁取りを施した。篠山山頂一帯は標高 950 m 前後を境として上高度では高木が減少し、笹を中心とする植生に変化するので、その範囲には色を塗り込み表示した。篠山には標高 950 m を境に植生と岩質変化による自然結界が存在し、これが篠山に対する信仰の根源をなしている。

(2) 篠山(弥山)蓮華座の空間構成

ここでは「篠山絵図」(以下、「絵図」と略す)と「篠山争論関係史料」⁽¹²⁾(以下「史料」と略す)を拠りどころにして、現地踏査と測量調査で得られた見解を整理する。

「絵図」では標高900mより上の山頂部は一面に笹を描いており、「篠山」の呼称が実際の植生から生じていることがわかる。この範囲には現在も高木は無く、山頂一帯はミヤコザザに覆われ、アケボノツツジの古木群落やシャクナゲが存在し、町指定天然記念物に指定され、旧来の植生分布を今でも認めることができる。「絵図」の笹が拡がる頂上部裾とその下の木々が描かれる植生の境目には山頂裾部を一周廻る道が描かれている(図5「篠山絵図」のII・V)。「史料」のうち万治元年(1658)十月十五日付け乙29番の3「目安ヲ以申事」⁽¹³⁾には「彼山之腰を引廻したる道筋御座候其道より上を



写真15 山頂の矢筈池

信仰の根源となる靈池で海と繋がり旱魃時にも水位が変化しないという。

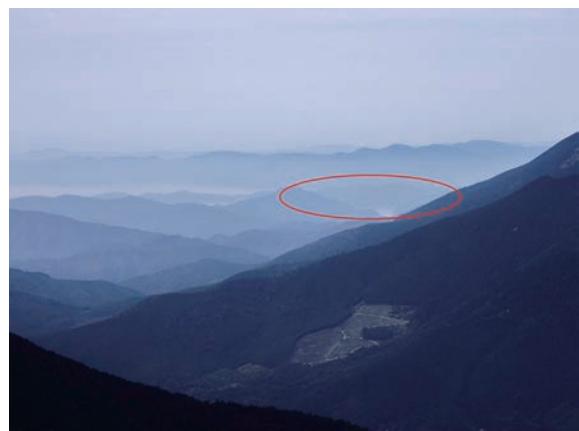


写真16 篠山山頂から直視できる「鯨大師」を祀る九島

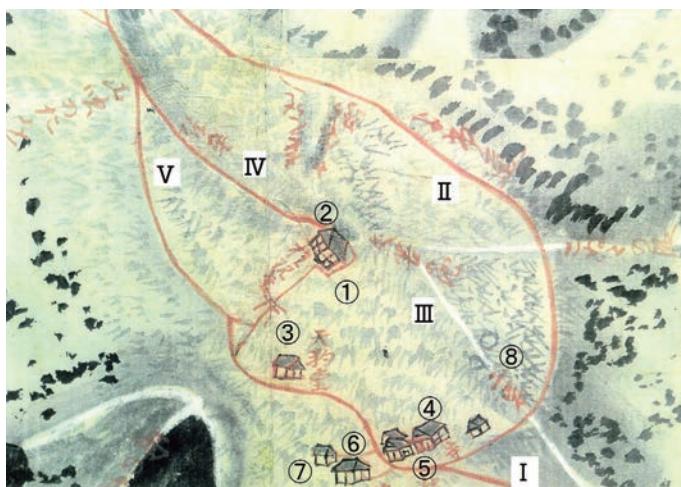


図5 「篠山絵図」に描かれた山頂周辺と書込み

山頂部の笹の植生範囲と外側の木々が拡がる境目が明確に描き分けられその植生の境目に等高線に沿った道(II)が存在したことが見て取れる。

I 参詣道 II 行道路 III 尾根稜線 IV 主稜線上の道 V 行道路

① 権現堂 ② 矢筈の池 ③ 天狗堂 ④ 寺 ⑤ 観音堂 ⑥ 鐘突堂
⑦ 辺路屋 ⑧ 二岩



写真17 尾根筋に位置する二石



写真18 観音堂跡背後の大岩

蓮華座と名付け即權現山と申ならわし候蓮華座之の頭上に矢筈之池と申御池御坐候」と記され、この道を結界線として山頂までの空間を「蓮華座」と仏の座に見立てて權現山と称し、山頂には「矢筈之池」という神池が存在することを記述する。この裾を一周廻る道を設けるという背景には、植生変化点を結界線と認識して管理道を設け、これを廻る行道が存在したこと、結界線から上部を神仏常住の世界と見立て、厳格な植生護持が図られたという山岳信仰觀に基づく二点の存在を示唆している。

図5の「篠山絵図」を見ると、山頂には②「矢筈之池」前面に営まれた①「權現堂」が描かれる。矢筈之池は直径2m程の小さな池であるが、これは宇和海と繋がっていて日照りが続いても水位が変わらないという靈験を持つ靈池で、申(1656年)ノ六月十八日付け乙29番の3頭書荷之事⁽¹⁴⁾には「一彼山境目池之中矢筈石境目ニテ尤堂寺も両国へかゝりし儀」と、山頂の矢筈池の石を国境とし、(觀音寺の)堂等も伊予・土佐両国にかかるものだという認識であったことが読み取れる。この他、篠山の呼称について「篠山争論関係史料」には「小篠山」「両国之弥山」「笠權現堂弥山伊予土佐両国」とあり、小篠山⁽¹⁵⁾とも弥山信仰⁽¹⁶⁾に基づく弥山とも称していたことがわかる。

再び図5「篠山絵図」の「蓮華座」の部分を見ると行堂道に沿って、④「寺」、⑤「觀音堂」、⑥鐘突堂、⑦辺路屋が集中しており、神宮寺と記される「篠山觀音寺」を構成し、山頂の權現堂に上がる途中には篠山權現を守護する天狗を祀った③天狗堂が存在したことがわかる。この場所に篠山權現の本地仏を祀る觀音堂が営まれた理由として、磐座として宗教利用がなされた大岩断崖の存在を指摘しなければならない。現地踏査時に觀音堂跡基壇の背後一面に大岩が所在することを確認しており(写真18)、磐座信仰の場所が觀音堂へ繋がることが想定される。

これに加え注目すべきは、尾根稜線を白線で描いている点で、その形状は「Y」字で矢筈の形をしており、その要にあたる位置に「矢筈池」が存在する事、下側の尾根を挟んで左右両側に巨石を描き⑧「二石」(二ツ石のこと)と記している事で、現地踏査の結果、この尾根筋は觀音寺から山頂に通じる行者道であり、二ツ岩は山頂部への結界門であることが想定された(写真17)。

「篠山山形模型」及び「絵図」が存在することにより、「蓮華座」と称された篠山山頂域は、山頂が篠山權現垂迹の靈池を核にして、その前面に礼拝施設である權現堂を設けた神の座であり、裾部が本地仏の十一面觀音(觀音寺)鎮座という神仏融合した形態を自然植生の中に護持した靈場であったことが読み取れる。

(3) 篠山の結界祭祀

次に注目したいのが靈場篠山における結界祭祀の在り方である。「篠山山形模型」「絵図」の双方には国境をなす主尾根の稜線上に二箇所の「一之王子」という地名の書き込みがあり、(図4平面地形図に赤字で記入)その場所はなだらかに延びる尾根筋が傾斜を強める地形の変換点に相当(図4A-B断面)する事から、篠山本体の聖域の結界点に熊野九十九王子に通じる一之王子社を配したものと想定し、南側の地点に対して現地踏査を行い遺跡の所在を確認した。

篠山山頂から南に延びる主尾根稜線が傾斜を緩やかに変える標高約780mの地点には篠山駐車場が設けられ、ここから南方向に約500m間は高低差も無く、なだらかな尾根筋が続く。その中ほど、駐車場から約350mの地点には標高782mと一際高まるピークがあり、「貝ノ森」と呼ばれている。この地点は現地踏査を行った折に人工の加工部が存在することが判明したので測量調査を実施し、空間の読み取りを行った。

現地は細い尾根筋の南側斜面が岩盤剥き出しの大岩で、その前面には $10\text{ m} \times 7\text{ m}$ 規模の平場が設けられ、左右には地山を削り出したと考えられる土壘（C・D）状の高まりを確認することができる。大岩の前には $3\text{ m} \times 4.5\text{ m}$ 規模の長方形土壘（A）が認められ、東北側は尾根道（参詣路）と繋ぐ通路の出入口となっている状況を見てとれる。

調査の結果、この大岩は宗教的利用が認められる磐座であると判断し、地点名を取って「貝ノ森」磐座と呼ぶ。土壘状の高まり（C・D）は視覚上の結界を意味し、長方形土壘は北側に平らな方形の礼拝石が伴うことから磐座に伴う祭壇と解釈した。

地点名の「貝ノ森」とは山中修行の宗教者が、篠山権現に登拝するにあたり法螺を鳴らす故事に由来するのではないだろうか。

「貝ノ森」磐座から尾根稜線を約 150 m 先端に向かって進むと、一ノ王子社跡となる。ここには尾根稜線上の最も高い地点に $7.5\text{ m} \times 5\text{ m}$ 規模の人工平場を設け、北側には後背面カットを施し、南側には土留め石を一列に並べた社殿跡が良好に残っている。

社殿跡は基礎列石の多くを失っているが、その形状から流造で横長の相殿形式であったと推定される。社殿中心線の前には5、6段分の石段を設け、その前は伊予側の正木地区からの参詣道（西側）と土佐側の窪川村からの参詣道との合流点となっている。篠山山中の国境をなす稜線上で磐座祭祀の痕跡と、熊野信仰に通じる王子社の存在を確認したこと

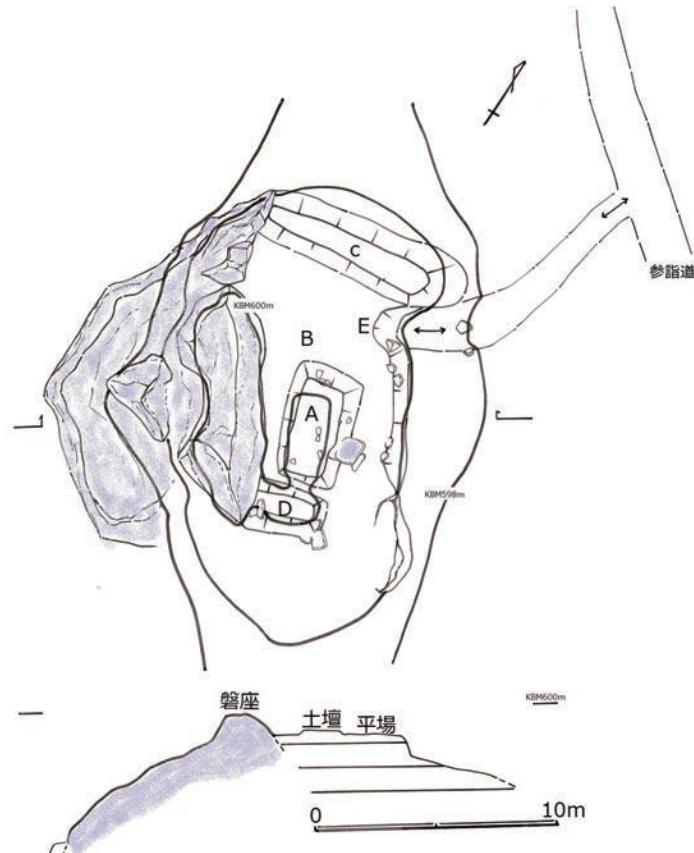


図6 篠山「貝ノ森」磐座

磐座前には地山を削り残して両脇に土壘状の高まりを設けた祭祀空間となる平場を設け、大岩前面には長方形の祭壇が伴っている。

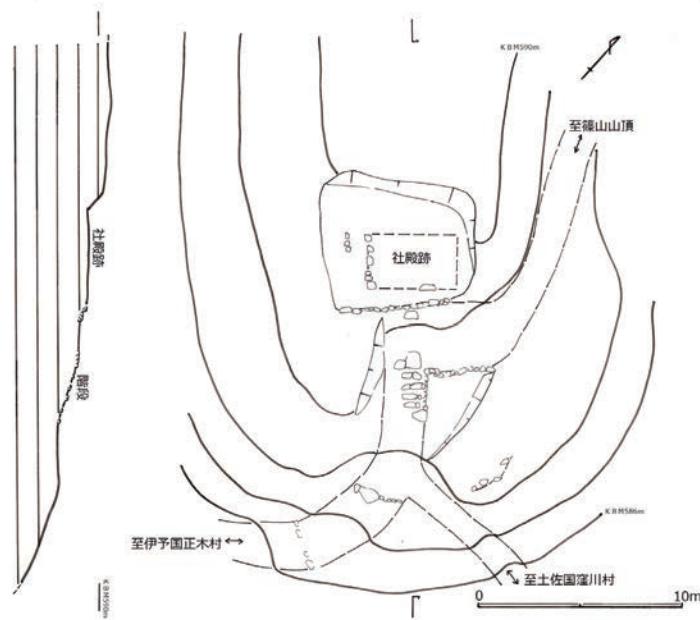


図7 篠山南一ノ王子社跡

「一之王子」と書き込まれた地点で伊予側・土佐側の参詣道の合流点と社殿の遺構を確認した。



正面

背面

光背（表）

光背（裏）

写真 19 旧篠山観音寺十一面觀音像

は、奈良山における信仰の実態を解明する糸口につながる成果である。

（4）篠山観音寺の觀音像と鰐口

明治の神仏分離で「蓮華座」の末端、篠山八号目に所在した觀音寺は廃寺となり、南麓の正木地区の歡喜光寺境内（曹洞宗）に仏像・仏具類が降ろされた。その後權現堂を設けて祀られたものの多くの資料が失われている。ここでは中世期に遡る本地仏の十一面觀音立像と寛正七年（1460）の銘を持つ鰐口を紹介する。

十一面觀音立像は像高 86 cm、頭部縦 15.5 cm、頭部幅 11 cm、頭部奥行 13.5 cm、面幅 10 cm、面高 10.2 cm、足幅 18 cm の規模を持つ。頭部の化仏は欠損し一木造で内割はない。室町期の造像と推定。現在は旧暦 10 月 17 日に、觀音寺での祭礼を村人が継承した花取り踊り時に供養が行われている。

鰐口は篠山観音堂に懸けられていたもので銘文は線彫りで形式からも年代には問題がない。『宇和旧記』には、もう一基存在したことが記されているが現在は失われている。銘は右側に「予州…」左側に「寛正…」と年月日、正面下に上向に「宗諦之置」と奉納者名を刻むので、写真 20 右の読みとなる⁽¹⁷⁾。



写真 20 旧篠山観音堂鰐口

径 20 cm 寛正七年（1460）

与州御庄篠山觀世音寺之鰐口
宗諦之置
寛正七年丙戌閏二月十八日

(5) 観音靈場としての篠山信仰の位置付け

等妙寺が置かれた「奈良山」という靈場がどのような拡がりを持つのかを検討するために、鬼ヶ城山系の南に隣接し、同じ伊予国・土佐国の国境をなす篠山山系の詳細を検討してきた。最後に篠山信仰について総括しておこう。

篠山は四国八十八ヶ所第40番札所の平城山觀自在寺の前身で奥之院とされる⁽¹⁸⁾。先にみたように篠山には植生変化に基づく自然結界が設定され、古来自然護持⁽¹⁹⁾が図られた観音靈場で山中修業の空間、山寺であり、里寺としての觀自在寺の信仰の根源である「奥之院」として位置付けることができる。どちらが後先というものではなく両者は併存関係にあり、伽藍を形成し経営主体となる寺家と山岳靈場とでは根源が異なる。初期の施設は篠山を直接遥拝する場所に遥拝所として設けられたと考えるが、愛南町御荘平城^{みしょうひらじょう}の地に営まれる現在の觀自在寺境内には、鎮守社としての篠山権現が大師堂前に祀られてはいるものの、直接篠山山系を望むことはできない。

觀自在寺はその寺名が觀自在（觀音）であるにもかかわらず、本尊は薬師如来である。これは弘法大師が一靈木で薬師如来像と脇侍の十一面觀音像・阿弥陀如来像及び舟板名号（宝判）を彫ったという一靈木三体信仰に基づく縁起に由来するものであるが、脇侍を寺名にするのには無理がある。宗教民俗学者の五來重は、この仏像の組合せについて阿弥陀如来は熊野本宮、薬師如来は熊野新宮、觀自在菩薩（觀音菩薩）は那智（千手觀音・如意輪觀音）の本地であり、海を中心とする熊野信仰は新宮を中心に展開している。篠山は十一面觀音を本地仏とする山岳靈場であり、熊野信仰が両寺成立の基層にあるという事を指摘している⁽²⁰⁾。篠山が熊野信仰の影響を大きく受けている事は、結界鎮守に熊野九十九王子に通じる一之王子社を配置する事からも妥当な見解と考える。

再び篠山に目線を戻すと、山頂の矢筈池からは宇和島沖の九島を目視することができる（写真16）。九島には觀自在寺の海の奥之院にあたる臨海山龍光院（宇和島駅近くの宇和島市天神町に所在）に合祀されている、鯨に乗って上がったという説話を持つ「鯨大師」⁽²¹⁾ゆかりの願成寺が所在する。

このような伝承が成立する背景には、山岳靈場篠山（觀音信仰）—觀自在寺（觀音信仰／津）—海の信仰（補陀落信仰）—觀自在寺奥之院（九島鯨大師）というように、山の信仰と海の信仰の両者が基層に存在するからで、海を介して鬼ヶ城山系と篠山山系は繋がっているのである。

最後に山号となっている「平城山」について指摘しておきたい。史料的には近世期以前に山号を付したものは無く、弘法大師開基伝承が唱導され広められる元禄頃から、「平城（ひらじょう）」の地名を平城天皇に付与した説話が語られるようになり「平城山觀自在寺」と名乗るようになる。これは、目線を変えれば「ならやま」と読むこともできる。鬼ヶ城山麓の等妙寺の山号が「奈良山」であることから、これと重なる山号は避け、字をえて「平城山」とした可能性は無いのだろうか。海を介して両山系が繋がるのであれば、広義の「奈良山」というものを想定した方が、拡がり繋がる信仰の実態を反映した解釈といえるのではないだろうか。

3 山岳靈場「奈良山」の世界観

(1) 山形模型作成の背景と山岳靈場の聖域観

鬼ヶ城山系だけではなく、篠山山系まで含めた広義の「奈良山」では全国的に見ても類例が殆どない山の立体模型二基が作製されたわけであるが、その背景には、山岳靈場特有の事情が存在している。それは靈山における国堺争論である。それまで未確定であった国境や藩領境を確定させようとする動きに起因して争論が生じたのであるが、その根源には山岳における神仏への聖域観と聖域護持観

念が存在している。古来信仰対象となってきた霊山の多くでは、分水嶺をなす主尾根の稜線上が国境や郡境に用いられる事例は多い。

稜線上には人が通行可能な肩幅（幅三尺）だけ刈り拓いた尾根道（三尺道）が設けられ、そこは聖地と聖地を繋ぎ、神仏が往来する「路」であると同時に、行者道・修行路の意味合いを持っていた。これはもちろん、山棲の生活路でもあり獵師の通行路（獵道）としても用いられる。この聖地と聖地をつなぐ尾根道と、これに付随する一定幅の斜面は神が支配する領域であり、人間が支配するものではないという観念が存在した。従って、そこでは尾根道を基軸に自然林や原始林が護持されており、こうした事例は全国に存在する。境界が確定している尾根稜線の場合でも、「防火帯」と称して共同管理の空間となっている事例は多く現在に至るまで県境が確定しない事例として山梨県・静岡県の県境未確定地、富士山山頂と福岡県・大分県の県境未確定地、英彦山山頂が存在する。

同じ目線で「奈良山」を見ると「目黒山形模型」に記入された「等妙寺火道頭」が関連する。これは等妙寺の火道の頂上という意味であり、現等妙寺背後の主尾根稜線のピークに所在する「大師ヶ森」から始まり、山頂部の郭公岳山頂東側に取り付いている。この尾根道は近世期の村境でもあり、現在も鬼北町と松野町の行政境として踏襲されている。尾根稜線上には裾部から大師ヶ森地点（十禪師宮奥宮と推定）を始め、等妙寺火道A地点・B地点など旧等妙寺寺域東側の結界を構成する護法と推定する集石・列石・磐座からなる遺跡が続き、山頂からは滑床渓谷の「鳥居石」に下る尾根道と連続する。これは「鳥居石（一の鳥居／結界）」—「郭公岳山頂磐座（山宮）」—「護法群」—「大師ヶ森（十禪師宮奥宮）」へと連なり、奈良山の山神（権現）や修行者が通行する聖なる道（写真8のB（鳥居石）から始まる道・図3参照）ということができる。

山形模型としては西日本有数の修験道の拠点で豊前・筑前両国に跨る天台修験道（本山派）別山として位置づけられる彦山派本山の英彦山⁽²²⁾に残された「彦山小形」が最古の事例である。これは元和二年（1616）に彦山靈仙寺大講堂再建時の余材で製作されたもので、彦山が主張してきた中世期の七里四方の神領や、守護不入の特権が近世期において失われていくとき、山伏たちが伝統的に聖域化していた彦山三所権現・靈仙寺境内だけは護持するために作成し、公儀に対する境界の説明や確認に再三用いており、出羽国の山岳靈場鳥海山でも山頂部の境界をめぐる争論に伴い山形模型が作成されている。

鬼ヶ城山系、篠山共にこれに類する山形模型が作られた背景には、人的な境界を明確に定めないと

写真21 彦山小形（福岡県指定文化財）

木製 高 62 cm 幅 131 cm 奥行 135.8 cm。

17世紀。（英彦山神宮所蔵）

彦山の聖域・領域を示した木製の立体模型で現地形とも非常に合致し「山の木図」とも称される。元和二年（1616）小倉藩主細川忠興は彦山靈仙寺の大講堂を再建したが、その余材で制作したと伝える。従来宝物として靈仙寺の大講堂に保管されていた。模型は把手の付いた台座の上に載せられ、公儀に対する境界の説明や確認に何度も用いられていて、詳細に説明するためにも立体模型が必要であったと考えられている。





写真 22 日振島東沖より遙拝する両峰の「奈良山」 中央が篠山山系、左が鬼ヶ城山系



写真 23 宇和島湾より遙拝する1000m級の峰々が続く「奈良山」鬼ヶ城山系

いう靈山觀が根底に存在するからで、両山域が江戸時代初期までこの観念を護持した靈山であったということを裏付けている。一般的な山絵図ではなく、木製の山形模型を作成しようとした新たな発想の原点には「彦山小形」存在の情報が影響していたのではないだろうか。

(2) 海からの目線—ようはい遥拝—

山岳信仰を考える場合に、欠かすことができない目線として、神靈が宿る靈山や巨樹、磐座、滻などを直接目視し、拝む遥拝という行為の存在である。密教の修法ではたびたび觀念上の見立てが行われるが、実際の山中修行においては、遥拝は極めて重要な要素で、行所の一つである「華立」は山中修行路中（行者道・峰中路と呼ばれる）に無数に設けられ、「花の木」と呼ばれる檜などの常緑樹を竹筒などの容器に挿し、これを通して山岳靈場の見通しの効く尾根稜線から対象物を礼拝するというものである。

では、山岳靈場全体の姿はどこから遥拝するのが、最も神々しく見えるだろうか。これが、意外と障害物の多い陸地ではなく、海面なのである。例えば靈峰富士は駿河湾内から視ると、視界を遮るもののが一切なく、裾から山頂まで、美しい弧を描いている。3000m級の山並みが海岸線から一気に立ち上がる立山連峰の雄姿は、富山湾を挟んだ能登半島側から遥拝すると、余りの神々しさに身の震えを感じるほどである。「奈良山」の姿も宇和海や、日振島沖から遥拝すれば、壮大な立体化した曼荼羅空間の全体像を眼中に収めることができる。山岳信仰は海からの目線と、常世や補陀落淨土という

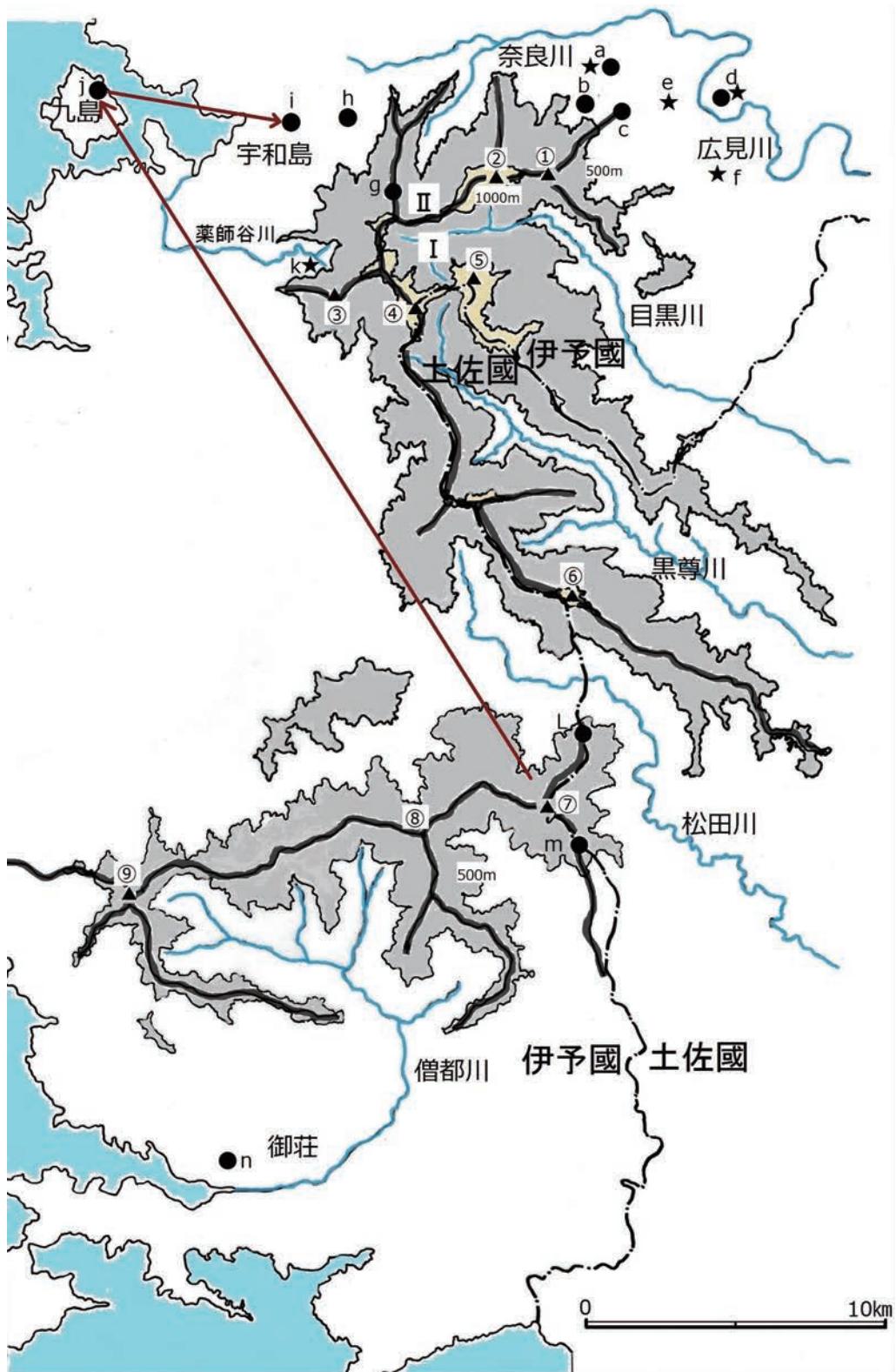


図8 鬼ヶ城山系（北）・篠山山系（南）と寺社の関係（一主尾根稜線）

●社寺・堂 ★平安後期・鎌倉仏 ①郭公岳 ②高月山 ③權現山 ④八面山 ⑤三本杭(篠山) ⑥大黒山 ⑦篠山
⑧瀬戸黒森 ⑨觀音岳 a 等妙寺 b 等妙寺旧境内 c 大師(太子)ヶ森 d 広福寺(六奉行寺院) e 宮川弥勒堂 f 照源寺
g 六角堂 h 静蓮寺(六奉行寺院) I 龍光院(觀自在寺奥ノ院) j 鯨大師 k 東光寺(權現山本地仏) L 篠山一ノ王子社(北)
m 篠山一ノ王子社(南) n 觀自在寺(四国八十八カ所第四十番札所) ※ →は篠山と奥之院の関係

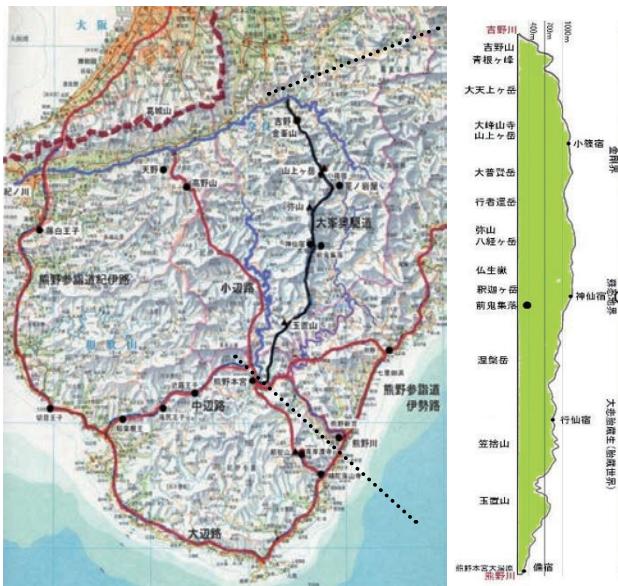


図9 紀伊半島中央部に設定された金胎一具の曼荼羅觀

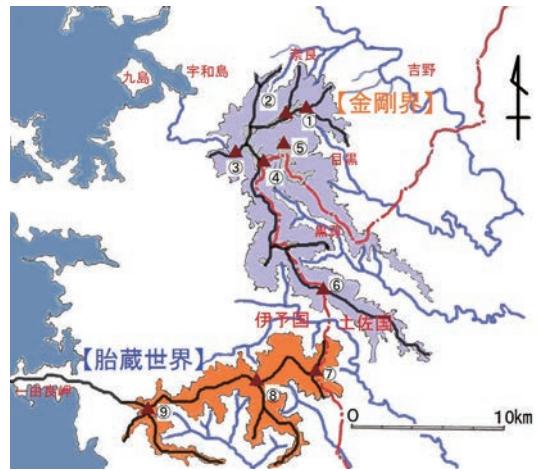


図10 「奈良山」に設定された金胎一具の曼荼羅觀

- ①郭公岳 ②高月山(高ツク)
 - ③権現山 ④八面山 ⑤三本杭(笹力森)
 - ⑥大黒山 ⑦篠山 ⑧瀬戸黒森 ⑨觀音岳

海の神仏の世界との繋がりが切り離せない。

(3) 「奈良山」に敷かれた金胎一具の曼荼羅觀

山岳靈場が成立する思想的背景には山系に対し大悲胎蔵生の世界（胎蔵世界）と金剛界の世界と認識する「両峰一具」の觀念があり、これを「金胎両峰」と称する。このように実際の山系を曼荼羅に見立てる試みの最初は延暦二十四年（805）には成立したとされる「大峰縁起」に見ることができるが、この史料は単独では現存せず、その内容が本文記事の記載年号の下限が建久三年（1192）の『諸山縁起』⁽²³⁾に組み込まれ記載されている。このうち第一項大菩提山（大峰山）仏生土要事では「入大峯籠、十二年春出胎蔵界後門、同十三年庚寅年同入金剛界初門」と大峰山系に対し金胎両部の曼荼羅世界であることを明記し、続く「胎蔵初門」以下では胎蔵世界の曼荼羅中諸尊の名のついた嶺が列記されていて、大峰山系に対して実際に曼荼羅空間に見立てたことがわかる⁽²⁴⁾。これに次ぐのが文保二年（1318）に比叡山慈眼房光宗によって編まれた「溪嵐拾葉集」所収の修驗道関係の切紙で、大峰を金胎両峰の峰ととらえ、入峰修行は曼荼羅である山岳に結縁することが目的と記されている⁽²⁵⁾。修驗道の根本道場である吉野の金峰山から熊野本宮に至る山岳靈場成立の前提にはこの曼荼羅觀が存在している。

図9は金峯山一大峰山一熊野本宮の曼荼羅觀を特に断面として模式的に示したものであるが、留意すべきは、これが単独で孤高の山ではなく、連続する山並みという地形的要因が必要という点である。つまり、曼荼羅世界に見立てた峰々の連なりを修行者自らが^{とそう}抖擞しながら、各ピークの山頂部（杜）や鞍部に護法として迎えた諸神仏を礼拝し、あるいはそこから遥拝する行為を主目的とする山中修行ということである。この目線で広義の「奈良山」を金胎一具の曼荼羅觀で見た場合、南に位置する篠山山系の峰々は熊野信仰を根底にしていることから大悲胎藏生（胎藏世界）に、北に位置する鬼ヶ城山系の峰々は吉野・金峯山の金剛界として認識することができ、南西四国の峰々に熊野・金峯山の世界觀を導入した「大峯写し」⁽²⁶⁾が存在したことになる。

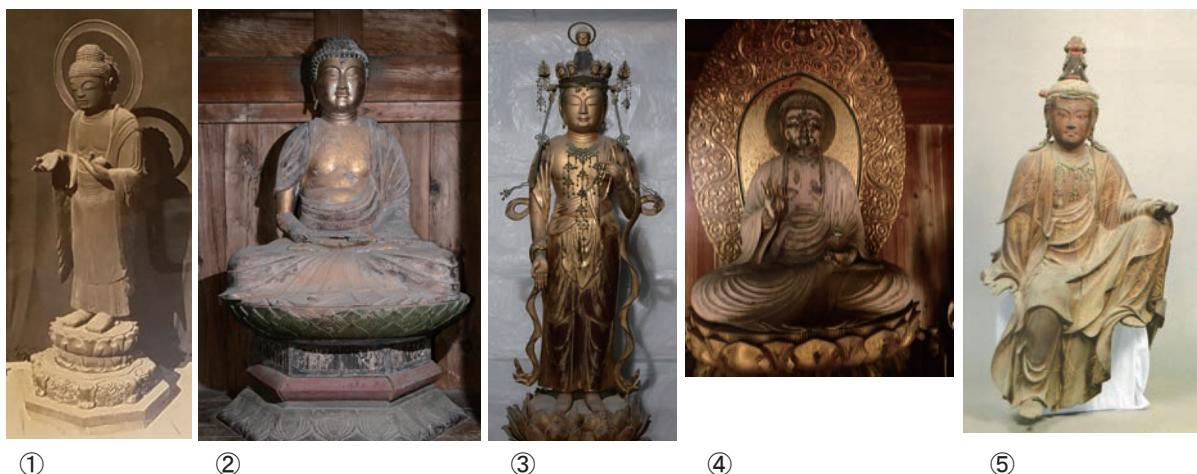


写真24 「奈良山」周辺に残る平安・鎌倉仏

① k 東光寺（權現山本地仏 薬師如来 11世紀／像高150cm） ② d 広福寺（藏王權現社 阿弥陀如来 11世紀／像高75cm） ③ f 永昌寺普門堂（旧天満宮十一面觀音 12世紀／像高86cm） ④ e 宮川弥勒堂（弥勒菩薩 13～14世紀／像高61cm） ⑤ b 旧等妙寺（菩薩遊戲坐像 13世紀前半／像高89cm） ※アルファベットは図8の位置に該当

4 畠場「奈良山」の成立と位置

等妙寺旧境内を検討する視点として「奈良山」という（山岳）畠場概念を導入したことにより、幾つもの展望が浮かび上がる。大峯写しで金胎一俱の立体曼荼羅として設定された「奈良山」の世界を紐解くことにより、発掘が進められている旧等妙寺が成立した壮大な背景を描いてみた。『歯長寺縁起』には、元応二年（1329）に等妙寺開山の理玉和尚は宇和荘に入り奈良山を開いたと記し、これは発掘調査で姿を現した旧等妙寺の本堂跡や客殿・庫裡一体型の本坊跡が示す年代観とも矛盾しない。

しかしながら、「奈良山」という目線で周囲を見渡すと、松野町側の広見川流域には字吉野に藏王神社が存在し、字延野々には「奈良山」での山中修行を実践する等妙寺同行集団「寺奉行六箇所」の一つ広福寺に平安後期の阿弥陀如来座像が、永昌寺普門堂にも旧天満宮本地仏と推定される平安後期の觀音立像が伝来する。さらに字豊岡の宮川弥勒堂の弥勒菩薩坐像（鎌倉後期）は「奈良山之絶頂」から移したものという⁽²⁷⁾。宇和島側でも、權現山の本地仏は平安後期の薬師如来立像というように、鬼ヶ城山系周辺には平安後期から鎌倉期に属する仏像が集中することが特筆される。しかも等妙寺旧境内本尊として祀られていた二臂菩薩像遊戯坐像（伝如意輪觀音像）は鎌倉時代前期の作例であり、等妙寺に伝来する四天王寺系二臂如意輪觀音画像は院政期の愛媛県最古の仏画と、いずれも等妙寺成立を大きく遡り、前身寺院の存在を考える必要がある。

こうした状況から勘案すると、山岳畠場「奈良山」の成立は早ければ摂関期には遡り、院政期（12世紀）には金峯山（弥勒菩薩—如意輪觀音—藏王權現）信仰に通じる畠場として確立したと指摘することができ、この下地が既に存在していたからこそ、天台戒律復興教団が新たな活動拠点として奈良山中に等妙寺を構えた、という脈絡が見えてくる。それは、山岳畠場として特定の教団が独占しない「奈良山の寺」⁽²⁸⁾から国王の氏寺と称される京都白河の法勝寺末「奈良山等妙寺」への変化であり、14世紀前半の宇和荘に大きな宗教変革の波が押し寄せたことを意味している。

【註】

(1)『等妙寺旧境内国史跡指定10周年記念シンポジウム 中世等妙寺の具体像に迫る』愛媛県鬼北町教育委員会 2018

年。このうち調査担当者の幡上敬一「基調報告 奈良山等妙寺の調査研究における現状と課題」、織田誠司「【研究報告1】等妙寺旧境内の発掘調査成果について一本堂・本坊跡を中心にー」で総括されている。

(2) 等妙寺開基 700年記念 鬼北町・愛媛県歴史文化博物館共催テーマ展『奈良山等妙寺の至宝と国史跡等妙寺旧境内展』鬼北町教育委員会 2020年。【会期：奈良山等妙寺の至宝展〈文書展示室〉・令和2年11月14日～12月13日、国史跡等妙寺旧境内展〈考古展示室〉・令和2年11月14日～令和3年1月24日】

(3) 拙稿「山寺研究から靈場研究へ」『山岳信仰と考古学III』同成社 2020年 p195～213。

(4) 長野覺「山岳聖域の自然林と神木」『宗教民俗研究 第14・15合併号』日本宗教民俗学会 2006年。修驗道は石楠花（シャクナゲ）を靈樹・神木として扱う。大峯山寺本尊蔵王権現と役行者像はもちろん山上宿坊の祭壇には花の有無に関わらず石楠花を供え、これを聖地に移植して石楠花帯の自然結界を形成する事例は全国的に存在する。

(5) 結界とは密教思想に基づき聖地・伽藍・堂・社等に靈的バリアを設け淨地とすることで、山岳靈場、聖地には幾重にも結界が設けられるが、尾根稜線・川など自然界の堀（変換点）や植生変化点を自然界の結界（自然結界）とする事例は一般的に行われている。修驗道で尊ばれた御神木の群落を保護し、接ぎ木をして群落を拡げその植生により結界空間を設けることが修驗道の根本道場である大和大峯山系や九州彦山系などで確認できる。

(6) 山岳信仰に基づく山名の特徴として、特に宇和郡周辺には山頂部に対し「〇〇森」と呼称する箇所が多いのが特徴で、山頂部を神の宿る自然結界として植生を意識し残してきたため、「森」がつく山名が集中している。

(7) 『目黒山形模型並びに関係資料調査報告書』愛媛県松野町教育委員会 2000年。『目黒山形模型並びに関係資料調査報告書II』愛媛県松野町教育委員会 2005年。

(8) 『[建徳寺文書] 宇和島・吉田両藩の林業と目黒村山境争いの顛末書（抜粹）』松野町教育委員会 1991年。

(9) 平場中央に一石だけ柱受けの加工を施す礎石が据えられるとすれば、例えば修驗道の峰入りに先立つ柱松のような柱を立てて祀る祭祀などが想定できるかもしれない。

(10) 篠山境界争い及び「篠山山形模型」「篠山絵図」に関する記載内容は『篠山山形模型並びに関係資料調査報告書』宇和島市教育委員会 2009年に基づいている。山形模型は現在、宇和島市の伊達博物館において展示保管されている。

(11) 「篠山絵図」は現在愛南町指定文化財に指定され、一本松郷土資料館に保管展示されている。「元禄二年の篠山絵図」との貼紙があるが後世に貼られたものである。宇和島市の調査によって、この絵図は「篠山山形模型」とその記載範囲、及び記載地名などが一致し、篠山における国境争論に関連した「篠山山形模型」作製にあたり制作されたことが裏付けられている。

(12) 『篠山山形模型並びに関係資料調査報告書』宇和島市教育委員会 2009年所収「II 篠山争論関係文書」P28～39。

(13) 先掲「II 篠山争論関係文書」P33。

(14) 先掲「II 篠山争論関係文書」P31。

(15) 「篠山」の呼称は鬼ヶ城山系では最高峰の三本杭の旧名「篠ヶ森」を連想させる。西日本最大の修驗靈山彦山では、山頂部の植生は高木がなく笹が繁茂し、彦山講の代参者はこの笹を刈って持ち帰り、仲間と分けたのち細かく碎いて飼育している牛馬の餌に混ぜて与えれば病気にならないという信仰があった。権現を祀る靈山山頂の笹は、権現の靈験があると信じられる靈的植物であった。

(16) 「彌（弥）山」とは須弥山淨土に例えられた靈山や神仏の宿る靈山＝御山という意味を持つ山名。因みに国東六郷山の惣鎮守（山神）、太郎天童垂迹の靈山も屋山（弥山）、安芸宮島の神体山も弥山、出雲大社背後の北山山系の最高峰は弥山、伯耆大山の山頂を構成するトップは弥山であり、大山の回峰行を「弥山禪定」という。

(17) 愛南町の公式ホームページでは「与州御庄篠山觀世音寺鰐口寛正七年丙戌閏二月十八日宗諦穩置之」と紹介している。

(18) 石野弥栄『伊予国觀自在寺の歴史』平城山 觀自在寺 2010年。

(19) 自然護持というのは、結界内を神仏常住の淨地として一木一草も刈り取ることなく保全するため、継続的に廻峰行などを行って護持を図る行為で、自然保護とは本質的に異なる。我国の山岳靈場には都市近郊にもかかわらず、護持を図ってきたことにより、自然林や植生が保全されている事例が複数存在する。

(20) 五来重「薬師信仰総論—薬師如来と庶民信仰—」『民衆宗教史叢書第十二薬師信仰』1986年 P26・27。

(21) 鯨大師は弘法大師の創建と伝えられる。鯨大師は島で参拝には不便ということで寛永八年（1631）に対岸の元結掛に移され、その後明治時代に、龍光院に合わせ祀られ、残されたお堂を馬目木大師と呼ばれるようになった。

(22) 西日本最大規模の修驗道彦山派の靈山、彦山は靈元法皇の院宣により享保十四年(1729)に「英」の一字を賜つたことから、彦山を英彦山に改めている。研究者による歴史的な記述ではそれ以前を「彦山」、以後を「英彦山」と使い分ける場合がある。また、山そのものを指す場合は地名表記として「英彦山」を使う。

(23) 「諸山縁起」は修驗道の根本靈場である大峰山、熊野山、金峰山、葛城山および笠置山の縁起、由緒を集めた記録で現在宮内庁書陵部に所蔵され、内容は大菩提山(大峰山)仏生土要事、熊野參詣還向次第をはじめ多数の項目にわたる。これが『諸山縁起』として集大成されたのは鎌倉初期とされる。

(24) 宮家準「中世における修驗の思想—教義書を中心として—」『中世文学』24巻中世文学会1979年p6~10。宮家は「諸山縁起」所載の二十項目の第一項は「大峰山の起源伝承」でこれは平安時代末から鎌倉時代にかけて熊野詣をした天皇や上皇が披見したり、歴代聖護院門跡が相承した「大峰縁起」と推測している。

『諸山縁起』の「胎藏初門」以下の諸尊名が付いた嶺の順番を胎藏世界現図曼荼羅に当てはめると、外金剛部院西方中央(最下端)の難波天からはじまり、隣接する仏・菩薩を順次たどって外金剛部院東方中央(最上端)の守門天女まで達し、実際の曼荼羅設定が行われたことを読み解くことができる。2004年度に科研費研究成果報告がなされた「大峯の口伝・縁起形成に関する文献学的研究—『諸山縁起』を中心に—」(研究代表者 川崎剛志)では「大菩提山仏生土要事」には天皇・貴顕・高僧・行者等による峯々への經典安置が多数注記されているが、うち高僧については『僧綱補任』に拠り採用されたことを根拠に、古代から続く国家的大峯信仰史を捏造すべくこれらの註記がくわえられたのであろうと推断している。

(25) 300巻のうち113巻が現存する。比叡山西塔北谷の黒谷別所にいた光宗(1276-1350)の著で、1318年(文保二)6月の自序がある。仏事・法会の次第や教理の研修に際して作られた筆録や聞書を書きとどめたもので、《阿婆縛抄》《覺禪抄》と並ぶ、中世の佛教教学集成の代表的な書とされる。

(26) このような金胎一具の峰が設定された事例(「大峰写し」と仮称しておく)は、彦山(胎藏世界)と宝満山(金剛界)、彦山(胎藏世界)と福智山(金剛界)、肥前牛尾山(金剛界)と肥前・筑前国境の背振山(胎藏世界)、出雲鰐淵山(金剛界)と枕木山(胎藏世界)、伯耆大山(金剛界)と美(三)徳山(胎藏世界)など国峰(くにのみね)と呼ばれ、平安末から鎌倉期にかけて諸国に設定されたが、解明されている事例はまだ少ない。

(27) 松野町に所在する正善寺は一遍上人(1239-1289)所縁の寺とされるが、ここに所蔵される「正善寺旧記・擬旧記」(万治二年(1659)・安永四年(1775))という史料に「有今奈良山之絶頂欲以弥勒尊像称十二坊中之本尊者非也奈良山者台家也峨眉山者濟家也」という記載があり、奈良山から移した弥勒像を祀ったのが、この宮川弥勒堂と考えられる。

(28) 等妙寺建立以前の「奈良山」に中世山寺が存在したという意味で「奈良山の寺」と呼んでおく。但し、旧等妙寺の場所に限らず、広範囲に及ぶ山中には複数の堂・社が営まれていたと考えており、それらを総合した呼称として用いている。